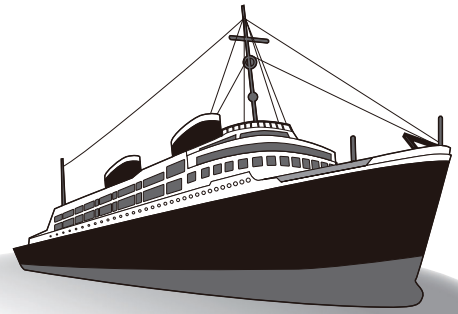


# ちょっと ブレイク しませんか?

第24回

モル・フランダース [1996年 米英]



イソップ寓話集に「遭難者とアテナ女神」と題する小話がある。

金持ちのアテナイ人が、他の客と乗り合わせて船の旅をしていた。猛烈な嵐になり、船が転覆したので、他の皆は泳いで助かろうとするのに、アテナイ人はひたすらアテナ女神に呼びかけ、助かった瞬間には夥(おびただ)しい供物を捧げる、と約束するばかり。一緒に船から放り出された男が一人、すぐ傍で泳いでいて、アテナイ人に向かっていうには「女神に祈るのもよいが、自分の手も動かせ」

人生は航海にも喩えられる。一人の女の波瀾万丈の人生を描いたダニエル・デフォー原作の映画作品「モル・フランダース」は、朝の連ドラより深みがある。18世紀初頭の倫敦。孤児院の反抗児フローラの元にヒブル(モーガン・フリーマン)という男が訪ねてきて彼女を連れ出す。フローラの母親の友人だというヒブルは、ある篤志家の依頼を受けてフローラを探していたのだという。ヒブルはその篤志家の住む新天地米国への旅の道すがら、フローラに母親の半生を語って聞かせるところから映像が展開する。

30年ほど前、処刑寸前の女囚が看守の子を身ごもり出産した。モル・フランダースと名付けられたその子は教会に引き取られた。成長したモルは教会の雰囲気にならなれず脱走。追っ手に捕まりそうになった彼女を救ったのは慈善家マザワッティ夫人だった。夫人から上流階級の教養とマナーを教わるモル。しかし実の娘たちの嫉妬を買い、モルは屋敷を出ていくことになる。上流階級の男相手の娼館を経営するオールワージー夫人の元に身を寄せたモルは、絶大な権力を持つ彼女に逆らえず娼婦として働くことに。牧師や政治家などのセレブと嫌々ベッドを共にするモルの唯一の心の支えは娼館の用心棒ヒブルだけだった。ある日フィールディングという貧乏な若い画家がモルを指名する。彼はモルに指一本触れず、ひたすら彼女をモデルにスケッチをするだけ。最初は馬鹿にしていたモルだったが、やがて彼に惹かれていく。そんな時、夫人に騙されて金を巻き上げられたことを根に持った牧師らに娼館が襲撃される。重傷を負ったモルはフィールディングの家に逃げ込み、同棲することになった。彼女を両親に紹介したいと言うフィールディング。彼の実家は実は貴族だった。両親は当然結婚を認めないが、ふたりの決意は固かった。モルは妊娠し幸せな日々を送っていたが、フィールディングは天然痘で死んでしまう。ひとりで出産した娘だけを生きがいに失意の日々を送るモルは、娼館襲撃後のどん底の生活からはい上がり米国に屋敷を購入するまでになったオールワージー夫人と再会。夫人はモルを強引に米国への船旅に同行させる。娘と引き離されたモルは悲嘆に暮れるが、ヒブルが必ず子どもを見つけ出すと約束してくれた。ところが米国を目前にして船は嵐に巻き込まれ沈んでしまう。長い物語を終えるヒブル。母親が死んだことを悲しむフローラ。しかしそこに現れたのは溺れ死んだオールワージー夫人に成り済まして巨万の富を得たモルだった。再会した親子とヒブルは平穏な日々を送った。



映画評論家・精神科医

かかわ ゆうへい  
粥川 裕平

岡田クリニック院長  
名古屋工業大学 名誉教授

人生は決して希望を絶やさないと。それには自力本願が重要だ。もっとも船の遭難では、2014年春の韓国客船沈没事件のように自助努力では解決しない場合もある。